

《聖隷雙葉女学園》シリーズ

■ 体験版 ■

再会の文化祭で……

夏目 なつめ

棗 なつめ

□ □ 注意事項 □ □

普通にこのPDFファイルを開くとウィンドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大（100〜125%くらい推奨）して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

□□登場人物□□

● 葛尾 朋代(くずお ともよ) || 聖隷雙葉(せいれいふたば)女学園 二回生。身長 .. 142cm、体重 .. 43kg、スリーサイズ .. 85(Cカップ)・52・83。
純情そうな美少女で外見どおりの良い子だが、エッチになると意外に積極的？。



● 鍵谷 吉哉(かぎたに いちや) || 青芯学院(せいしんがくいん、通称『青学(あおがく)』と呼ばれるこの街随一のエリート校) 三回生。
中肉中背でこれといって取り柄はない。帰宅部。



● 川野辺 翠（かわのべ みどり） Ⅱ 聖隷雙葉女学園 二回生。身長… 159 cm、体重… 53 kg、スリーサイズ… 89（Eカップ）・56・88。

朋代のクラスメイトで親友。幾分ぼやんとしたトコロはあるが、エッチは大好きで朋代のエッチ方面の師匠。

● 百目鬼 妙（どうめきたえ） Ⅱ 聖隷雙葉女学園 二回生。身長… 135cm、体重… 39kg、スリーサイズ… 77（Bカップ）・44・79。

外見は年下にしか見えないが朋代と翠のクラスメート。エッチに限らず色々”あぶない”性格の女子。



* * *

※ 本作は『親友の彼女がキスしたいならいいよ、』と言った。』のキャラがメインで登場する続篇的な作品ですが、独立して読めるように配慮しています。

季節は秋、学園祭のシーズンである。

とは言え、まあ、男子校の僕にはあまり盛りあがらないイベントなのだが。そんなある日の事だった。

僕の部屋のポストにピンク色の可愛い封筒が入っていた。

そして、中には『聖隷雙葉(せいれいふたば)女学園学園祭』と書かれた入場チケットが入っていたのだった。更に、『コスプレ喫茶 ≪葉っぱ≫ドリンク無料券』というチケットも同封されていた。そして、その裏には鉛筆書きの丸っこい字で「朋代」と記されていた。

それを見て僕は、以前友人の相馬 剛史(そうまたけし)がボヤいていたのを思い出した。

「ほれ、いつだったか、お前の部屋借りた時に紹介した朋代(ともよ)って女のコト……覚えてっか? ……あいつな『聖隷雙葉』つつう お嬢さま学園の学生でさ……処がさあ、あそこってマジもんの超々お嬢さま学園なんよ……」

「ふ、ふん……そ、そうなんだ……」

この街の男子学生で『聖隷雙葉』を知らない者はたぶん居ないと思うが、その件よりも相馬の言う『紹介した』云々の方に僕の動悸は急速に高まった。何故ってあの時、僕はとても彼には言えない事までしてしまったからだ。（※詳しくは拙作『親友の彼女がキスしたいならいいよ、と言った。』を……是非WW）

しかし、相馬は僕の動悸には気づいていないのか普通に話を続けた。

「それでな、あそこの学園祭は入場券がないと校門すら、くぐれねえんだって！」

「へ、へええ……だったらさ……あ、あの彼女に……貰えば、いいんじゃないの？」

僕は未だ動揺したまま答えたが、相馬は何故だか不満気に鼻を鳴らしてそっぽを向いたのだった。

「……………俺も……言うだけ言ったさあ……………」

（あれ？ ……また、別れたのかな？）

なにしろ相馬は浮気性というか、次々彼女を変えては僕に見せびらかすのが常だったからだ。

そんな僕の言外の問いに気づいたのか相馬は不機嫌そうにボヤいた。

「別れてねえぞっ！ ……お、俺は別れてねえからなっ！」

「べ、べつにそんな事、言っていないじゃん……」

何か非難されたような気がして僕も珍しく声を荒げると、相馬は暫く部屋の天井を睨んでいたが、やがてボソつと言った。

「……………か、家族の分しかない……………つてよお……………」

僕は目の前にあるピンク色の可愛い封筒と二枚のチケットを改めて確認した。

相馬の言に因れば『家族の分しかない』という彼氏（もしかしたら過去形？）にも渡らないプラチナチケットである。

一瞬、相馬にあげようかとも思ったが（いや、一瞬だけけど）まあ、我が人生初の女学園の学園祭にでかける事としよう。しかも、深層のご令嬢たちの花苑で開催される幻のプラチナ学園祭である（……………つて、いや、ちよつと、テンションあがり過ぎ
だけだ）。

そして当日――。

かなり興奮気味の僕は『聖隷雙葉女学園』の学園祭にやってきたのだった。

しかも、受付でチケットを見せると、何故か受付女子に案内されていきなり『コスプレ喫茶《葉っぱ》』に案内されて現在に至る……………。

「いらっしやいませ〜♪……お一人さまですか〜?」

出迎えた大柄な美少女の笑顔に——いや、その姿に僕の視線は釘付けになった。



勿論、写真でなら見た事はある。しかし——、
(な、生バニー……さん!?)

しかも、学園生とは思えない胸元のけしからんボリニウム。
「むふんっ ♪……………89のEカップよお ♡」



(いや、訊いてない……………ですがあ!?)

両手で胸元を寄せて谷間を強調する美少女バニーさんから慌てて視線を逸らした僕

はポケットから取り出した『コスプレ喫茶《葉っぱ》ドリンク無料券』というチケットを手渡すと、彼女は裏側の名前を確認して少し驚いたような顔をして言った。

「ふくん……君が朋ちゃんのお……」

値踏みするように僕の全身に視線を走らせてから美少女バニーさんは言った。

「ねっ？……当然、お席は個室で良いよね？」

「こ、こ、個室う？」

その『個室』というどこか淫靡な響に僕の顔は（たぶん）真っ赤になっていたのだと思う。そんな僕の動揺を知ってか知らずか巨乳美少女バニーさんは言った。

「ドリンク券もあるしい……個室で、親密にい、お話ししたいでしょうっ？」

「うっ……お、おねぎやい……お願い……します……」

声が裏返ってますます真っ赤になった僕を揶揄（からか）うように彼女は続けた。

「あつれっ？……もしかして、君い……ちよつと、エッチな期待しちゃった？」

「な、な、な、なあ……」

「にゅふんっ♪……個室だからって、踊り子さんの衣装にタッチは厳禁よお？」

「し、し、しません……よう……」

首を、ぶん、ぶん、横に振って否定する僕に彼女は言ったものである。

「えっつ？ ……しないのお？」

(い、いや、だからっつ！)



僕の無言の抗議をスルーして彼女は話を戻す。

「それじゃあ、個室料は二、〇〇〇円でっすっ！」

慌てて僕が財布を取りだすと何気に覗き込まれた。

「コスプレチェンジ料金も一、〇〇〇円ね、戴きまゝすっ♪」

「……………」

有無を言わず三、〇〇〇円を支払わせた（奪いとった）美少女バニーさんは僕に極上の笑みを返してヘッドセットに声を送り込む。

「七番個室、コスプレチェンジでご指名入りましたっ♪……葛尾朋代嬢、お願いしまゝすうっ♥」

そのヘッドセットの声は店内にも（いや、教室だが）響き渡っていた。途端に店内に（いや、教室だが）ざわめきが広がる。尤も、それは店内に居た客からではなく店員（というか学園生）たちの囁き合う声が大半だったような気もしたのだが。

そして、『七番個室』なる部屋（？）に連れ込まれた僕にバニーさんが言った。

「裏喫茶《おピンク》へようこそっ♪」

「う、裏喫茶あ？……お、お、おピンクう？」

「はあくいい……こちらの個室席はっつ、学園に内緒のサービスをうっつ、提供しているんですよ♪」

「な、な、な、内緒のサービスう……ってえ!？」

「んふっ♪……朋ちゃんの彼氏さんだから、サービスう♥」
そう言つてバニーさんはレオタードの胸元を、ぺろん、と剥いたのだった。



推定（いや、彼女の自己申告によれば） 89センチEカップの美巨乳が僕の目の前
で、ぶるるんっ、と揺れた。

「それじゃあ、ど・お・ぞっ♪」

そう言ってバニーさんは両手でけしからん双つの膨らみを、たゆんつ、と持ちあげて僕に笑い掛ける。

「ど、ど、ど、どうぞ……って!？」

僕はそのけしからんサイズにも拘らず少しも垂れていない正に『美巨乳』から眼を離せなかった。

「で、で、でも、さつき『踊り子さんにタッチは厳禁』だって……」

「あたしはく、『踊り子さんの**衣装**にタッチは厳禁』って言ったのよお？」

美巨乳バニーさんは、にまゝつ、と笑って続けた。

「あたしは、川野辺 翠(かわのべ みどり)、『みどりん』って呼んでねっ♪」

「あつ……ぼ、僕は……か、鍵谷 壱哉(かぎたに いちや)です……」

「いちや君ね……それじゃあ、いっちー君……ほら、触って、さわってくえ ♡」

(い、いっちーくん……って?)

僕の途惑いなど気にする素振りも見せずに彼女は僕の隣に腰を降ろしてその豊満な美巨乳を突きだした。

「ほらあ、**衣装**でないトコなら、生タッチ、OKですう ♡」

それでも躊躇(ためら)う僕に焦れたのか、翠さんは僕の両手首を掴んでその美巨乳に誘うと、僕の手ごと、もにゅ、もにゅつ、と揉みしだいた。

「う、うわわう……や、柔らかい」

「むふふうん♪……それじゃあ、裏喫茶《おピンク》のメニューを説明するから揉み揉みしながら聞いてねっ♪」

そして、ソファアに並んで坐っている僕の膝の上にメニューを広げた。

松コース Ⅱ 二、〇〇〇円

竹コース Ⅱ 三、〇〇〇円

梅コース Ⅱ 五、〇〇〇円

スペシャルコース Ⅱ 時価

「端から、手、口、ばいばい、ねっ♪」

「……………」

僕が呆気にと取られて絶句したのをどう思ったのか彼女は更に言葉を続けた。

「まあ、判り易く言うとお……松コースは《手によるご接待》、竹コースは《お口で

のご接待》、梅コースは《谷間でのご接待》……………」

(いや、それくらいは判るけど……)

「にゅふふうん♪……………でもお 朋ちゃんの彼氏さんなら、あ、基本的に、受け付けないけど、梅コース《素股のご接待》でも、好いわよお？」

「いや、あの……………あのですね……………」

《朋ちゃんの彼氏さん》と誤解されたうえ、過激なバニースタイルであっても同世代の女子から《素股のご接待》とか言われて僕は酸欠になりかけていた。

しかし、彼女は違う意味に取ったのかも知れなかった。

「おやあつ？……………も〜つとお《大胆なご接待》が希望かにや〜つ？」

「い、いや、だから……………か、彼氏じゃ……………ないです……………」

「……………つて、そつちかいっ！……………でもお『ドリンク無料券』を貰ったつてコトはあエッチ済み……………つて、コトよね〜つ？」

「えっ!?!……………あ、ああ、あ、あの……………」

朋代さんの友人のようだが『エッチ済み』とか、そんなコトまで口にして良いのか途惑う僕に翠さんは追い討ちを掛ける。

「むふふん♪……………それじゃあ、《スペシャルなご接待》にしますう？」

「そ、それって、つまり……す、スペシャルって……」
視線が泳ぐ僕に、にまつ、と笑って彼女は答えた。

「ご想像のとおりですう♪」

「じ、じ、時価……って……か、書いてあるけど？」

「まあ、相手にも拠るけど……最低でも二本が相場じゃないかしら？」

笑顔を崩さず翠さんは言った。

「そ、それは……ゆ、ゆ、諭吉さん二枚って意味？」

僕の答えに彼女の声は一オクターブ上がった。

「おっ？ ……なに、なにい？ ……余裕で持っていそう？ ……どれどれ お財布は何

処かにやっつ♪」

「わ、わ、……ど、ど、どこ、触ってるんですかっ!!」

「お財布探してるのお……んふっ♪ ……この硬さは鱔皮、かにや？」

ズボンの上から遠慮もなしに僕の股間を弄(まさぐ)る細い手指に抗いながら僕は叫んでいた。

「ち、ち、ちぎやい……まふう?! ……さ、財布は……こ、こっち……」

身を振りながら取りだした財布を奪いとった彼女は迷わず中を覗き込む。

「やだ、やだ……諭吉くんが三、四、五枚い？……朋ちゃんの彼氏って、お大尽(お金持ち)さまなのお？」

「……ち、違います……か、返してくださいっ！」



財布を取り返そうと抗う僕の声に聞き覚えのある声が被さった。

「そ、そうだよ……か、彼氏じゃない……よう……」

振り返ると懐かしい笑顔があった。

「く、葛尾さ……ん……」

「いらっしやいませ……来てくれたんだ……」

顔を見合わせる僕たちは、しかし、翠さんに突っ込まれたのだった。

「だから、朋ちん……否定するトコ、違くない？」



「……って言うより、コスプレしてないじゃないっ！……仕方ないなあ、脱いで、ぬいでっ！……お詫びに、脱ぐのよう！」

そう言うと翠さんは朋代さんを脱がし始めた。

「あ、あ、あ、あの、あのう……？」

途惑う朋代さんと僕を尻目に翠さんは言ったのだった。

「コスしなかったお詫びに《大胆なご接待》するしかないっしょ？ ……お大尽（お金持ち）さまだし、OKよねっ ♡」



僕の返事も待たずに翠さんは、飛ばす、とばすっ！

「……じゃあ、二枚つてコトで……七番ボックスさま、葛尾朋代譲スペシャルコース指名入りましたっ ♡」

「だ、駄目だよぅ!? ……か、鍵谷くんなら……その、お金なんていらぬよう！」

「なに、なに？……そんなに《良いモン》持つてるのお？」
翠さんの問いに朋代さんは頬を染めて、こくん、と頷いた。
「それじゃあ二人で一枚にまけてあげるわっ♪」



「ふたりって……み、翠ちゃんも……す、す、する……のう……」
スカートもショーツも脱がされた朋代さんが不満気な顔で訊いた。
「だって、朋ちゃんの彼氏さんじゃないなら、良いんじゃない？」
「ううっ！……か、か、彼氏じゃないけど……近々、その予定っていうか……」

何か、ぼそ、ぼそ、と朋代さんが呟いていたが翠さんは気にした様子もなくヘッドセットに叫んでいた。

「……続いて七番ボックスさま、指名入りましたっ ♪ ……川野辺 翠(かわのべみどり)譲も、ダブルでスペシャルコースでえっすっ ♡」

そして、僕の財布から抜き取った二枚の『諭吉さん』を縦に四つ折りにして、一枚を朋代さんのストッキング留めに挟み、もう一枚を自分のけしからん胸の谷間に挟んだのだった。

それから翠さんは僕の上着の胸ポケットに何か小さな布切れを押し込んだ。

「ぬ・ぎ・た・て……だよ ♪」

「ちよ、ちよと、翠ちゃんっ！」

朋代さんが真っ赤になって翠さんの手首を掴む。

「今夜、使ってねっ ♡ ……朋ちゃんのお、に・お・い 付きっ ♡」

しかし、翠さんの挑発的な言葉にも朋代さんはその小さな布切れを取り返そうとはしなかった。

(……も、貰って……いいの……かな?)

「そ、それより……あの……まずは、ドリンクのご注文を伺います……」

朋代さんが開いた小さなメニューには、アイスコーヒー、アイステイー、コーラ、と書かれていた。その中からアイステイーを頼むと待つほどもなく個室の扉がノックされ三人目のバニーさんが現れたのだった。



「お待たせしました、ですだよっ！」

三人目の彼女はバニー服に、何故か頭には『魔王の角』みたいなモノを付けていた。
「……おや、おや、朋つちてば、もう準備万端……ですだよっ？」

そう言うのと笑いながら朋代さんをソファアに坐らせて、何と彼女の股間に運んでき

たアイスティーのグラスを傾けたのだった。

「ひいんっ、冷たいっ!!」

「ささ、ご主人さま、人肌で温まる前にイッキに飲む、ですだよっ!」

「の、の、飲む……って!?!」

僕は朋代さんの臍下に形作られた三角形の水溜りに思わず視線を投げた。アイスティーの茶褐色の液体の中で朋代さんのヘアーが揺れているのまで見えた。

「ささ、ご主人さま、はよう飲む、ですだよっ!」

魔王バニーさんが繰り返して促し、翠さんも、ぶん、ぶん、と頷いている。朋代さんの顔は……流石に見れないチキンな僕だった。

(こ、こ、これって……い、所謂(いわゆる)、わ、わ、わ、)

「現役JKの生ワカメ酒……はよう飲む、ですだよっ!」

「ああ、もしかして、いつちー君てば、生ワカメに味が滲み込むの、待ってる……とか?」

「ご主人さま……それって、世間で言うトコロの、変態さん、ですだよっ!」

そうノタマった魔王バニーさんが僕の耳を掴んで朋代さんの股間に誘導する。

「ご主人さま、はよう飲む、ですだよっ!」

僕は覚悟を決めるしかなかった……だろうか。

「く、葛尾さん……し、し、失礼……し、し、しますう！」

ひと言、断りを入れてから僕は《そこ》に口をつけた。

「ずっ、ずずずう……ずず、ずじゅうううっ！」

水音を立てて吸いあげると《容器(いや、朋代さんの太腿)》が、ぴく、ぴくくつ、と震えるのが判った。

更に吸い続けると唇の先に《ワカメ(いや、朋代さんのヘア)》が触れ、そのまま僕の口腔に吸い込まれた。

「あっ、んんっ……そ、それ、引っ張っちゃ……あんっ、だめですう！」

「ご主人さま、ワカメはしゃぶるだけに、ですだよっ！」

そして、魔王バニーさんは僕の後頭部を押さえつけてその三角地帯に沈めた。

「ひゃああんっ ♡」

色っぽい声が聞こえ僕の股間が痛いほど張り詰める。

「ほれ、ほれ、ご主人さま……その奥までベロを突っ込んで、残りもぜんぶ、吸いだす、ですだよっ！」

「あん、やあんっ ♡……お、おべロ……だ、だめ……えっ ♡」

艶めかしい声と共に ≪容器(いや、朋代さんの下半身)≫が、びくん、びつくんつ、と震える。

舌先に触れる少しザラついたヘアーの感触に僕の興奮が高まる。

「やん、だめえ♪……も、もう無いから、ぜんぶ、飲んだからっ！」

「おい、みどつち……ご主人さまに確認してもらおう、ですだよっ！」

「おおっと、了解だいつ！」

二人のバニーさんは息のあった連携をみせて僕の目の前で朋代さんの両足を掴むと大股開きしてしまった。

「いや〜〜あつ！……もう無いから、残って無いからっ！」

何故か朋代さんは両手で顔を隠して、股間は僕の前にフルオープンされたのだった。

「ご主人さま、はよう飲む、ですだよっ！」

「ほら、ほら〜、まだ透明なワインが残ってるわよお？」

「ち、違うから……それ、違うからっ！」

「朋ちゃん……いつちー君にスペシャルドリンクを差しあげないと、ねっ♥」

その言葉に朋代さんは顔を隠したまま、ぷる、ぷる、と首を横に振った。

「ま、ま、まさかっ！……スペシャルドリンクってえ!？」

「んふう♪……いまあ、いっちー君が想像したモノですう……でもね、もう一種類
……あるのよお？」

「な、ない、ない……ない、ないですう!？」



「えええ？……朋ちゃん、ご用意できないのお？」
そして、翠は僕の耳元で囁いたのだった。

「そ・れ・な・ら・う・つ……んふつ♪……あたしの黄金水、吞ませてあげましょうか〜っ？」
翠さんはそう言つてバニー服の股繰りを、ぺろんっ、と剥いた。



「——んなーっ!?!」
「か、か、鍵谷くんっ! ……じよ、冗談、冗談だから……ねっ?」

「あら、あたしは、本気(マジ)ですっ！……ちやあんと、^ど用意できるわよお♪」
「か、鍵谷くんは……そ、そ、そんなモン、飲みませんっ！」

「そんなモン……って、失礼ねえ？……あたしの『特別ドリンク券』を欲しがる男子 大勢居るのよお？」

僕はちよつとだけ判る気がしたが、口にだすと朋代さんに軽蔑されそうでその思いを飲み込んだのだった。

「それより朋っちの透明なワイン……はよう飲む、ですだよっ！」

そして、僕はまたしても魔王バニーさんに後頭部を押さえつけられ、朋代さんの股間にダイブしたのだった。

「わぶっ！……うぶっ、むぶぶぶ、ちゅぶううっ！」

「ひいんっ♥……にやめえええっ、そりい、らめれしゅうううっ♥……お、おべろをそんなに……いひい……お、奥までええええっ♥」

朋代さんが悶え、彼女の両腿が僕の頭をきつく絞めつける。

「うむう、んふうっ……」

口の中に朋代さんのやらしい匂いと味が充満し僕の脳ミソは沸騰寸前だ。いや、股間の暴君も沸騰寸前だった。

「おい、みどつち……ご主人さまのバナナを剥いてやる、ですだよっ！」

「はいよ……つてえええっ!?……あたしズボンの前がこんなに膨らんでるの、初めて見たわよおっ！」

翠さんの手がズボンのチャックを降ろし僕の《逸物》を取りだした。

「み、みどつち……ま、マジですげえ、ですだよっ！」

「ほ、ホントだあつ!……いっちー君の鱔皮のお財布 ガツチン コツチン になって膨張してるう……」

二人の手指が左右から伸びて、まるで僕の《逸物》の全体像を確認でもするように撫で廻した。

「ちよ、ちよとう……それ、擦ったいい！」

「むふふうんっ♪……ご主人さまはボクたちにい、おチンポ舐めを、きぼんぬ、ですだよっ！」

魔王バニーさんがそう言うのと、翠さんが僕を立たせこう言った。

「それじゃあ、いっちー君……あたしたちにい、コンデンスミルクをう、ご馳走してくださいさるう?」

「こ、コンデンスミルクって……わほおうううっ♪」

いきなり暖かい口腔に包まれて僕の腰が浮く。

——あんむっ、じゆるる、ちゅぶっ……んふっ、ずずずう、ずぶぶぶう……じゆる、じゅぶぶぶう、ちゅぶっ……はふっ、じゆるるるっ……んん、んぐっ……

更にざらついた舌が《逸物》の裏スジを舐め廻したかと思えば、窄めた唇が幹を圧縮して扱きたててきた。

「ほおおおう、わおううっ……ちよつと、ちよとう……まつへえ……」

しかも、背後に廻った魔王バニーさんがズボンとブリーフを摺り下ろして、あろうことか、尻の間に顔をつっ込んできたのだ。

「ご主人さまの尻穴……ホジるん、ですだよっ！」

「へえっ!?……なに……いつ、ふえ、※◆○㊦▲%◇#●▽っ!?」

トンでもない処に与えられた生暖かい刺激に僕の理性は宇宙の彼方に飛んでいた。

そして、その時だった——

「ふ、二人とも、ズルイいつ!!」

結果的に蚊帳の外に追い遣られてしまった朋代さんが叫んでいた。

「わ、わたしだって……負けない、もんっ！」

そして、ソファァーから降りた彼女は僕の首に両腕を廻し……

「うんむっ ♪ …… (ちゅぷ、ちゅぱ、ちゅぶうっ) ……ん…んんう… (ぺちよ、ちゅぷ、ちゅつ) ……ん…んくっ… (ちゅぽ、れりゅ、れろろろ) ……」

僕は唇を奪われていた。

それを見た二人のバニーさんの口撃が激しさを増す。

「わひよう、ちよ、まつふえ…お、お、お尻は、やめふええええっ!?!」

僕は必死に身体を振って下半身に取りついた二人のバニーさんを振り解き、尻を守るべくソファァーに逃げ込んだ。

「なんだよお……朋ちゃんは別格ってか?」

「ご主人さまは……エコヒイキ、ですだよっ!」

確かに、首に両腕で巻きついてた朋代さんは、そのまま僕と一緒にソファァーの上だった。

「*いんちゆういんちゆう* ♡」

僕に抱きついたまま朋代さんがピンクな声を洩らす。

「…いいモン! ……」**「番絞りはいただきよっ ♡」**

すると、翠さんは僕の股の間に割り込んでソツコー《逸物》を啜っていた。

「って、ボクはくっつ？……ですだよっ！」

そして、取り残された形の魔王バニーさんは僕の右手を掴んで言った。

「ご主人さま……ボクのまんこ、弄って欲しい、ですだよっ！」

そう言いながら彼女はショーツの中に僕の手を引き込んだのだった。



「って……な、なに、脱いでるん…ですかっ!？」

「ボクも……ご奉仕する、ですだよっ！」

「い、いや、いや、いや……き、君の分……は、払ってないからっ！」

「ああ、いっちー君……それ、大丈夫だから……妙ちゃんは、この『七番個室』専属の下僕だから、もう《代済み》なんよ……だから何してもOKだよ♪」

「《下僕》違うから……」

彼女は翠さんの頭を、ぽか、ぽか、叩いて言った。

「ボクはこの部屋専属のメイド、百目鬼 妙（どうめきたえ）、ですだよっ！」

そして、妙さんはショーツの中に引き込んだボクの手首を掴んだまま腰を振り始めたのだった。

「ああん、ああんう、ご主人さまのゆびい……え、エッチ、ですだよっ！」

「い、いや、いや、いや……ぼ、ぼ、僕が……してる……わ、わけじゃ……」

（僕の首に巻きついている朋代さんの腕が……きもち、絞めつけてきてる、ような……は、ははは？）

「ねえ、ねえ、このチンチンって、朋ちゃんの四本目だよね？」

僕の《逸物》をけしからんおっぱいに挟んで上下に扱きながら、翠さんが不穏当な発言をした。

「み、翠ちゃん……い、いま、その話、するう？」

「えく？……このチンチンって、『朋ちゃん専属』じゃ、ないんでしょ？……だった

ら、問題ないっしょ？」

「だ、だから……それは……微妙って、言うか……これからって、言うか……」

朋代さんが視線を逸らせて語尾を、ごによ、ごによ、させると、翠さんがまたもト
ンでも発言をした。

「それより朋ちゃん、あの三本目の浮気オトコとは、はっきり別れたんでしようね？」

「にゃ——っ!? ……にゃ、にゃに、ひってる、によよう!？」

朋代さんの喉から悲鳴のような声が迸り、彼女は翠さんの耳元で囁いた。

「あ、あ、あの彼……鍵谷くんの……と、友達、だから……」

(聞こえてるんですけど……)

「あはは、はは……で、でも、別れたんなら……う、うん、問題ない、よね？」
ぎこちなく呟く翠さんと目が合ってしまった。

「いや、ははは……でも、いっちー君の友達なら……うん、この際、一応、はっきり
言わせてもらおうけどね……」

翠さんがぎこちないながらも幾分真面目な顔になって続けた。

「あのオトコってば、朋ちゃんと付き合ってる時に、あたしも口説いてくるような奴だ
から……ねっ!？」

「あ、ボクも口説かれた……」

「まったくう、妙ちゃんにまで手をだすって、見境なさすぎ……」

「みどつち、それ、どうゆう意味、ですかよっ！」

妙さんは僕の指でオナニーしながら言った。

「ま、まあ、その……いっちー君も友達は選びなよ……あのオトコはあまり、感心しないなあ……」

「え、ええと……よく知ってます……」

僕はそう答えるしかなかった。

「あつ……やっぱいい……朋ちゃん、別れて正解だよお！」

翠さんがそう言い、朋代さんがなんだか嬉しそうに僕に頬を摺り寄せた。

「ご主人さまあ……ゆびい、おまんこに、突っ込む、ですだよっ！」

妙さんは終始マイペースだった。

そのまま——朋代さんがキスして、翠さんがパイ摺りフェラして、妙さんが指オナニーして——この微妙な空気を崩したのは、（やはり？）翠さんだった。

「ねえ、朋ちゃん？……あたしさくちよくつと、むら、むら、してきちやったからあ

……先に使って良いっ？ ……このチンチン、先に使って良いよねっ♪」

「み、み、翠ちゃんっ!? ……ず、ずるいいっ!」

「ああん、もうダメっつ! ……挿(い)れたいっ! ……挿(い)れるよっ♥」

朋代さんの非難の声も何のその、僕の股間に跨って握り起こした《逸物》を膣に啜え込んだ翠さんが背筋を、びくっ、びくくんっ、と震わせた。

「ひぎゅうううっ!? ……か、硬いいいいいっ♥ ……わひゃあああっ!? ……お、奥まで……と、届きゅううううううっ♥」

両目をきつく瞑って悲鳴のような嬌声(こえ)を迸らせた翠さんは、挿入しただけで軽く達してしまったようだった。

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

本篇では、この後はほぼエッチシーンです。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。